

**2015年度
活動報告書**

The Liberal Arts

慶應義塾大学教養研究センター

Keio Research Center for Liberal Arts

2015年度 活動報告書

慶應義塾大学教養研究センター
Keio Research Center for Liberal Arts

はじめに

慶應義塾大学教養研究センター所長 小菅隼人

2015年度の活動報告書をお届けします。詳しくは各項目に譲りますが、今年度の特筆すべき新しい活動として、音楽関連の実験授業の新規開設と神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア講座の申請・採択があげられます。

まず、株式会社龍角散、公益財団法人かけはし芸術文化振興財団、株式会社白寿生科学研究所からのご厚意により「発展・声楽」クラスを実験授業として立ち上げました。これまで教養研究センターの「身体知・音楽」では、音楽を通じて歴史・文化の中での人間の営みを追体験し、芸術に秘められた人間の生命力を、文学、歴史、思想など、多角的視点から理論的に見つめ直す教育を展開してきました。そして、新たに設置されたこの授業によって、音楽演奏の実践体験によって得られる、より充実した、身体を通じた歴史、文化、言語の総合的な学習が行なわれました。さらには、これに関連して、慶應義塾大学コレgium・ムジクムアカデミー・ヴォーカル・アンサンブルの定期演奏会の一環として、2016年2月に東北遠征演奏会が行われました。この取組みは、2015年度後期定期演奏会としての位置付けを持ち、この授業の履修学生の演奏を、被災地避難民の精神支援に結びつけることを目的としていました。すなわち、音楽の授業を、単なる履修科目を超えて、記憶や生命にも関わる教養教育として捉える試みです。演奏場所は、東北沿岸部被災地（岩手県大槌町）および、岩手県花巻市の2箇所です。東日本大震災から5年目の年にこのような演奏会ができたことはたいへん意義深いことと考えています。

次に神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア講座です。これまで、教養研究センターは、「身体知」、「生命の教養学」など、「生きることの意味」、「生きることの価値」を強く意識した研究・教育を行ってきました。これは、心や身体から乖離した知識偏重は、真の教養ではなく、むしろ教養の対極にあるものという直感によります。2015年、教養研究センターは、神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア構想の一環として、文化と教養の視点から、病と老いについての教育・研究活動を始めました。この活動の申請にあたって当センターより示された基本理念は以下の通りです。

私たちの生命は、生まれた瞬間から、死に向かう旅路を歩み始めます。その成長から衰弱への過程の中で、身体は、病気・健康・幼年・若年・壮年・老年と呼んでいる様々な状態のなかで揺れ動きませんが、やがて来るべき生命の衰弱体としての「老い」の向こうには、「一度境を越えたものは二度と戻れぬ未知の世界」（『ハムレット』）である「死」が広がっています。一人の例外も許さないこの存在の必然に向き合い、私たちは不可逆的に死に近づいてゆく時の流れに「恐れと慄き」を感じ、そこに向かって病み朽ち果てていく肉体の衰えと醜さを嫌悪し、嘆き、そして絶望しつつ、必死にそれに抗おうとします。しかし、一方、私たちの身体は、「病」と「老い」によって、時や記憶や死をも織り込んだ肉体としての「重みと凄み」を実現します。私たちは、そこに、「命がけで突っ立っている死体」（土方巽）としての生命のあり方を実感し、究極の美と聖性を見出します。生命は、誕生、成長、病気、衰弱、死の全てを包含するが故に美しく尊いものであると言えます。そうであれば、私たちは、「病」と「老い」が忌むべきもの、避けるべきもの、克服すべきものという思い込みにひとたび疑問符を付け、白紙の状

態で「病」と「老い」を考え直さなければいけません。もしかすると、病や老いは私たちにとって生きている証であり、恵みかもしれないからです。これは、私たちが、病と老いに正面から向き合い、私たちが生きる意味を教養の力で明らかにしようとするプロジェクトです。

この神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア講座については、2016年度も公募に申請し、採択されました。2016年度は「老い」を中心に構成していきたいと思います。基本的には、公開講座、ワークショップ、個人研究活動、研究会の四本の柱で考えていますが、教養研究センター内のみならず、慶應義塾内の諸研究所・センターとの連携も視野に入れて、さらに充実した活動を展開していきたいと考えています。

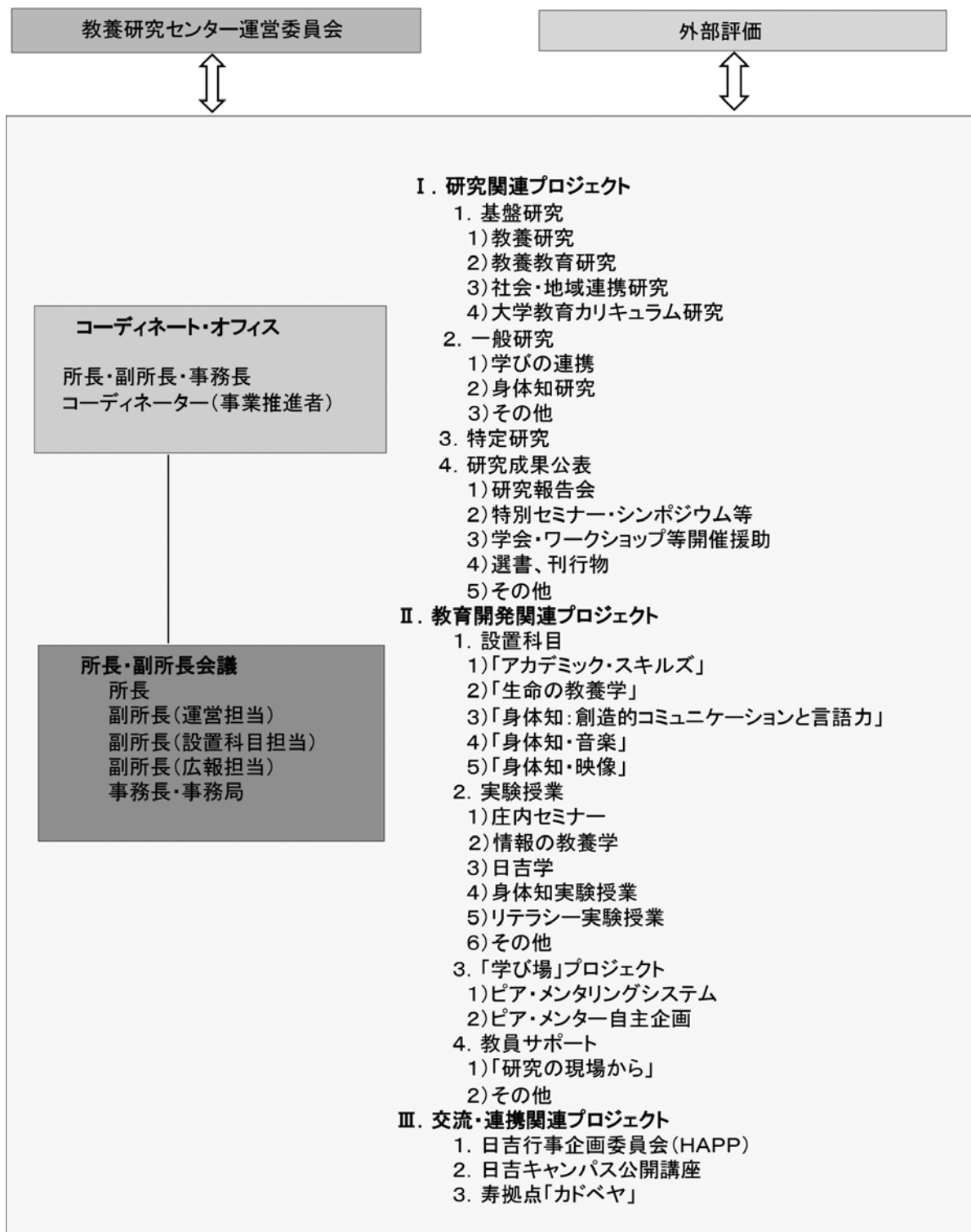
この他にも、教養研究センターは、多くの活動を行っており、それがこの報告書に示されています。そこで決して忘れてはならないのは、それらが、神奈川県、鶴岡市、極東証券株式会社様、住友生命保険相互会社様、致道博物館、株式会社龍角散様、公益財団法人かけはし芸術文化振興財団様、株式会社白寿生科学研究所様など大学外部からの様々なご支援を受けて展開できているという事実です。そのご期待に背くことがないように、我々所員・教職員で精一杯努力する所存ですので、今後ともご指導ご鞭撻賜りますようお願い申し上げます。

目 次

はじめに	03
組織構成と事業計画（2015 年度）	06
2015 年度事業報告	07
広報・発信	10
I 研究関連プロジェクト	13
II 教育開発関連プロジェクト	
1 設置科目	
1-1 アカデミック・スキルズ	14
1-2 生命の教養学	15
1-3 身体知：創造的コミュニケーションと言語力	16
1-4 身体知・音楽	17
1-5 身体知・映像	18
2 実験授業	
2-1 庄内セミナー	19
2-2 情報の教養学	21
2-3 日吉学	23
3 「学び場」プロジェクト	
3-1 学習相談（ピアメンター）	25
4 教員サポート	
4-1 研究の現場から	26
4-2 教員サポート講演会	27
III 交流・連携関連プロジェクト	
1 日吉行事企画委員会（HAPP）	28
2 日吉キャンパス公開講座	30
3 カドベヤ	32
4 神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア講座「文化としての病と老い」	33
資料編	
1 運営委員会委員	35
2 組織構成員	36
3 2015 年度の主な活動記録	37

※Ⅰ～Ⅲの分類は機能カテゴリーであり、センター内部の組織ではありません。1つのプロジェクトが複数のカテゴリーに属することはありますが、本報告書では便宜上、各プロジェクトを3つのカテゴリーのいずれかにまとめました。

教養研究センター組織構成と事業計画(2015年度)



コーディネート・オフィスは、運営委員会の付託を受けて教養研究センターの日常的な活動を執行する機関です。約20名のコーディネーターから構成されています。所長・副所長・事務スタッフに加え、教養研究センターの極めて多彩なプログラムを統括する代表や中心メンバー、学部や関連研究所からのメンバーが加わっています。教職一体での運営というのが教養研究センター設立からの理念ですが、これを実行しているのがコーディネート・オフィスです。

詳しい報告は各項目に譲るとして、ここでは、当初計画による分類に捉われず、内容から全体を概観して、研究活動、設置科目、啓蒙・サポート活動、地域連携活動、広報発信活動として概要を述べる。

1. 研究活動

2015 年度、「大学教育カリキュラム研究」については特段の研究活動はない。しかし、日吉のカリキュラム作成において大きな改革ポイントとなった日吉カリキュラム検討委員会の設置は、教養研究センターの基盤研究の一つの成果であり、大学における教養とカリキュラムの関係の重要性に鑑みて、今後当センターの事業として設置する予定である。GIC プログラムや経済学部 PEARL プログラムが展開する中、今後、グローバル化とカリキュラムの関係を集中的に考えなければならない時期が来ることが予想される。

「教養研究会」を設置して、「教養」の研究を始めることは、現執行部の大きな方針でもあったが、いまだ、手が付けられていないのが実状である。改めて 2016 年度、秋学期の開始を目指したい。古来、「教養」は常に「教育」と結びついてきた。その意味で、教養「教育」は、実践的な教養「研究」の出発点であり到達点であると言ってもいい。この点を踏まえ、現在の教養研究センターは、多彩でユニークな教育活動の創造・展開に大きな重点が置かれているが、それと同時に、いわゆる「教養」という概念を明確化する学問的研究活動が必要という認識は今後も堅持するつもりである。

2. 設置科目

1) 「アカデミック・スキルズ」

教養研究センターの教育活動の中で、最も大きな位置を占める「アカデミック・スキルズ」は、前年度同様、「アカデミック・スキルズⅠ・Ⅱ」「アカデミック・スキルズ（英語）Ⅰ・Ⅱ」が開講された。また、学生主体の「プレゼンテーション・コンペティション」と「論文コンペティション」も実施され、さらにこの授業の充実化がはかられた。

2) 「生命の教養学」

「食べる」を 2015 年度のテーマに、オムニバス講義が行われた。前年を上回る 90 名の受講者によって、「食べること」を教養という観点から再検討する

講座となった。2015 年度の新機軸として、この講座の中で「情報リテラシーセミナー」を行った。

3) 「身体知」

2015 年度は、横山千晶（法学部）を担当講師として、集中講義として実施された。ジェイムズ・ジョイスの『ダブリンナーズ』の最終章「死者たち」などを題材に声を中心にした講義と朗読を取り入れたワークショップが行われた。

4) 「身体知・音楽」

「身体知・音楽Ⅰ・Ⅱ」は、教養教育の一環として、音楽芸術の良き理解者を未来社会に派遣することを目指している。さらに、2015 年度は、発展・声楽クラスを実験授業として立ち上げた。音楽を通して教養教育のさらなる展開が期待される。

5) 「身体知・映像」

定員 20 名のところ、それを遥かに上回る人数の学生が申込み、学生たちの映像リテラシーに寄せる関心の高さを伺わせた。横山千晶担当講師のもとで同じ文学作品をふたつのグループで映像化する試みによって、集団制作の技術をも学ぶことができた。教室の使い方などで問題はあったが、事務局で使用指針を明確化して、改善を図った。

なお、1) 2) 3) 5) は極東証券株式会社による寄付金、4) のうち設置科目は住友生命保険相互会社による寄付金をもとに運営している寄附講座である。

3. 啓蒙・サポート活動

1) 「日吉キャンパス公開講座」

慶應義塾の知を広く社会に公開する、日吉における代表的活動としてこの講座がある。主として一般を対象とした有料の公開講座である。2015 年度は、秋山豊子教授を中心に「色と紋様の世界」をテーマとして、10 月から 12 月まで 8 週、計 16 名が講義を行った。大好評であった前年にもまして多くの申込を受け、このテーマに対する関心の高さを伺わせた。

2) 「神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア講座」

2015 年度の新規事業として、「神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア講座」に申請して採択された。この講座では、「文化としての病と老い」という

研究テーマのもとに、4回の公開講義、2回のワークショップ、研究活動、研究会の立ち上げを行った。公開講座においては平均100名以上の申し込みがあり、地域住民や学生を交えて活発な講義、討論が行われた。2016年度も引き続き申請し、採択されている。

3) 「情報の教養学」

主として学生を対象として、教職員にも開いた講座である。2015年度は「情報と社会」をテーマとして、講演会を6回実施した。各回とも聴衆が熱心に講演者の話を聞き、質疑討論も活発に行われた。岸博幸講師、福井健策講師など、広くマスコミで活躍している著名人も登壇し興味深い講演が行われた。ほとんどの講演はYouTube上で公開されている。

4) 「教員サポート講演会」

教員を対象とした啓蒙活動である。本年度は、2016年1月19日に日吉学生部(学生相談室)との共催で、平野学氏(文学部非常勤講師・学生相談室カウンセラー)による「学生相談室のカウンセラーとして思うこと——今を生きる学生達への支援のために——」と題した講演が行われた。

5) 「学習相談」

本年度も、日吉メディアセンターとの共催で行われた。学生を対象として、日吉メディアセンターと共同で行われているこの事業は、学生が自ら教えることで学ぶ「半学半教」の精神に基づき、教職員のサポートによって学生主体で行われている。慶應独自の学びの形を実践する事業として、また、「教養の方法」を模索する企画として、意義あるものと考えている。

6) 「研究の現場から」 「学会・ワークショップ等開催支援」

教養研究センターは、教職員を対象として、日吉キャンパスでの研究教育活動を活性化する様々な支援活動を行っている。これは、開催支援を行うことで当センターが所謂「ハブ」となって教職員を繋ぎ、教養の基礎概念である「多様性」のあり方を実現・模索するための試みである。詳しくは本文に譲るが、今後も継続させたい事業であると考えている。

4. 地域連携活動

1) 「庄内セミナー」

教養研究センターでは山形県鶴岡市にある慶應義塾鶴岡タウンキャンパスを拠点として2008年以来、庄内セミナーを開催してきた。2014年度に未来先導基金のプログラムとしての活動が終了し、2015年度は、新たに経常予算を計上して実施された。この事業では、地域と大学が一体になって学生を教育し、新たな教育方法として一つのモデルとなることが期待されるが、その意味では、単なる地域連携・交流活動ではなく、また単なる教育活動の枠にとどまらず、教養研究活動として位置付けられると考えている。

2) 「日吉学」

2013年度に開始した「日吉学」は講義とフィールドワーク、グループディスカッションによって知識を体験と結び付け日吉の自然、地理、歴史を総合的に学ぼうという試みである。「日吉学」は実験授業に位置付けられ、授業形式・参加学生の年齢構成・教授陣の多様性に特徴がある。2015年度にも活動は続けられたが、新たな整理と展開のために、2016年度春学期に検討委員会を持ち、2016年度秋より再開することになった。

3) 日吉行事企画委員会(HAPP)

2015年度、前年の形式を引き継ぎ、新たな内容で展開された。1990年代にはじまった入学歓迎行事は、日吉の各教員、職員、学生を繋ぎ、学部教育からこぼれ落ちた知を結びつける活動の受け皿として、その後、日吉行事企画委員会となり、今日の教養研究センターの一つのルーツとなった。具体的には、春学期は主に新入生歓迎行事、秋学期は公募企画行事を行っている。

4) 「カドベヤ」

2010年4月にコトラボ合同会社と慶應義塾大学により共同で設立されたオルタナティブスペース「カドベヤ」も継続中の重要な地域連携活動である。2015年度も授業としては法学部設置の「人文科学特論」および「人文科学研究会」のフィールドワークの場として機能し、「居場所『カドベヤで過ごす火曜日』」も行われた。「日吉学」同様、新たなコミュニティの創出という意味で、単なる地域連携・交流活動で

はなく、また教育活動の枠にとどまらず、教養研究活動として位置付けられると考えている。

5. 広報発信活動

2015年度の特筆すべき成果として、ウェブページの英語版を新たに作成した。これからの国際的広がりにも備えるためである。教養研究センターにとって、出版やウェブサイトでの知の公開は社会的使命であると考え、前年に引き続き、ニューズレターの刊行、教養研究センター選書の刊行、事業のアーカイブ化などを2015年度も継続しておこなった。

また、研究活動の一環として、工藤多香子副所長を中心に、読書会推進企画「晴読雨読」の準備を行った。この企画は、日吉キャンパスにおける読書会開催を促進することで教員の研究交流の機会を増やすとともに、学生を含めた日吉キャンパス全体の読書習慣の活性化をはかる、教員支援プログラムである。これは、①センター主催読書会の開催、②所員主催読書会の支援よりなり、2016年度に本格的に募集を開始することになった。当センターの新規事業としての発展を期待している。

(小菅隼人)

教養研究センターではウェブページを活用して研究・教育活動の最新情報を随時発信している。2015年度はこのページの英語版を新たに作成した。

慶應義塾大学出版会と連携し、活動成果を公開するため書籍等の出版にも力を入れている。2015年度の刊行物は以下のとおりである。そのうち、極東証券寄附講座関連の書籍は、『アカデミック・スキルズ学生論文集』をのぞき、慶應義塾大学出版会ウェブページで書誌情報閲覧および購入が可能である。それ以外の教養研究センター刊行物は、当センターのウェブページで閲覧可能となっている。

《教養研究センター 2015 年度刊行物》

1. Newsletter (ニューズレター)

日吉所属教職員とセンター所員を対象とした広報の一環として Newsletter を年 2 回刊行している。

■ 26 号 2015 年 5 月 15 日刊行

■ 27 号 2015 年 11 月 30 日刊行

2. CLA アーカイブズ

当センターでは教職員を対象としたサポートワークショップを実施している。2015 年度は 1 月 19 日に学生相談室カウンセラーである平野学氏を講師に招いた講習会を開催し、その内容を CLA アーカイブズとして刊行した。

■ CLA アーカイブズ 32

『学生相談室のカウンセラーとして思うこと——今を生きる学生達への支援のために——』2016 年 3 月 31 日刊行

3. 極東証券寄附講座関連

【アカデミック・スキルズ】

■ 「2015 年度アカデミック・スキルズ学生論文集」2016 年 3 月 31 日刊行

センターの看板科目である少人数制授業「アカデミック・スキルズ」では、一年間かけて学生が完成した論文を学生自身が編集し、論文集として 2005 年度より毎年刊行している。

■ 慶應義塾大学教養研究センター監修・西山敏樹／常盤拓司／鈴木亮子著『アカデミック・スキルズ 実地調査入門——社会調査の第一歩』2015 年 9 月 30

日刊行

社会調査に焦点をあてて調査の方法、データの収集・分析手法をわかりやすく解説した、「アカデミック・スキルズ」シリーズの一冊。

■ 慶應義塾大学教養研究センター監修・大出敦著『アカデミック・スキルズ クリティカル・リーディング入門——人文系のための読書レッスン』2015 年 10 月 30 日刊行

「アカデミック・スキルズ」シリーズの一冊として、論文やレポートを書くにあたり必要となるクリティカル・リーディングを指南する。

【生命の教養学】

■ 高桑和巳編『生命の教養学 11 性』2015 年 9 月 30 日刊行

オムニバス講義「生命の教養学」は、講座の内容を書籍にまとめ、毎年出版している。「性」をテーマとした 2014 年度の講座内容を出版した。

4. 報告書

■ 「教養研究センター 2014 年度活動報告書」2015 年 8 月 31 日刊行

■ 「2015 年度『庄内セミナー』報告書」2015 年 11 月 25 日刊行

■ 「神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア講座『文化としての病と老い』2015 年度業務完了報告書」2016 年 3 月 25 日刊行

5. 教養研究センター選書

■ 藤谷道夫著『教養研究センター選書 15 ダンテ『神曲』における数的構成』2016 年 3 月 30 日刊行

教養研究センターでは、研究の前線を学生にもわかりやすく紹介することを趣旨として選書を刊行している。原稿は毎年所員から募集し、選考を経て決定している。2015 年度はダンテの専門家である文学部藤谷先生が執筆された本を出版した。

(工藤多香子)

2015年度教養研究センター 刊行物一覧



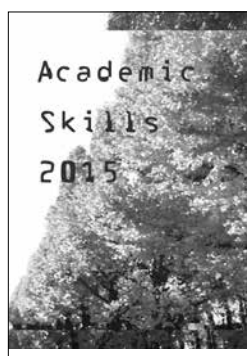
Newsletter26号
(2015.5.15 刊行)



Newsletter27号
(2015.11.30 刊行)



CLA アーカイブズ 32
(2016.3.31 刊行)



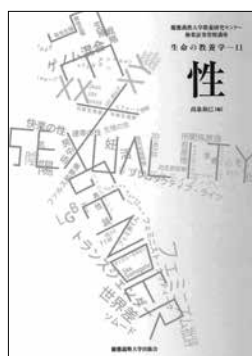
2015年度アカデミック・スキルズ
学生論文集
(2016.3.31 刊行)



アカデミック・スキルズ
『実地調査入門
—社会調査の第一歩』
(2015.9.30 刊行)



アカデミック・スキルズ
『クリティカル・リーディング入門
—人文系のための読書レッスン』
(2015.10.30 刊行)



2014年度極東証券寄附講座
『生命の教養学 11 性』
(2015.9.30 刊行)



2014年度活動報告書
(2015.8.31 刊行)



2015年度『庄内セミナー』報告書
(2015.11.25 刊行)



神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア講座『文化としての病と老い』2015年度業務完了報告書
(2016.3.25. 刊行)



教養研究センター選書 15
『ダンテ『神曲』における数的構成』
(2016.3.30 刊行)



基盤研究・一般研究の 位置付け、今後の展望 など

2015年度の基盤研究は、1) 教養研究、2) 教養教育研究、3) 社会・地域連携研究、4) 大学教育カリキュラム研究の四項目で構成され、一般研究は、1) 学びの連携、2) 身体知研究、3) その他の三項目によって構成されている。

基盤研究の1) 教養研究については、2016年度秋より、研究活動と啓蒙活動について新たな事業を検討中である。教養研究センターは、その基本的なミッションとして、「教養」に明確な定義を与えられるだけの研究蓄積の必要性を認識している。しかし、「教養」が人間にとって必要なものであるという共通認識を基盤として、その普遍性と個別性についての研究が必要なことを自覚しつつも、この点については、事業展開が出来ていないのが現状である。2016年秋を新たな出発点としたい。

基盤研究の4) 大学教育カリキュラム研究については、大学カリキュラム研究の成果が日吉カリキュラム検討委員会として結実して以来、次の段階での活動を検討中である。大学は今、グローバル化を求められ、GICプログラム、経済学部 of PEARLプログラムなど、英語での授業も展開しつつある。現在は、社会からの要請に応えるべく、具体的な授業設置が先行しているが、その根本的な理念としての理想的な大学カリキュラムについての総合的な研究が近々求められることになる。今は議論を少しずつ開始している状態である。

基盤研究のうち、2) 教養教育研究、3) 社会・地域連携研究については、事業計画のⅡ、Ⅲに組み込まれ具体的な局面で展開中である。特に社会地域連携については、カドベヤ、庄内セミナーなどを参照されたい。一般研究の1) 学びの連携、2) 身体知研究については、既に事業として展開しているか、設置科目の中に組み込まれているが、なお、新しい展開があった場合にすぐに対応できるように、教養研究センターの研究活動の中に組み入れられている。

(小菅隼人)

Ⅱ 教育開発関連プロジェクト

1 設置科目

1-1 アカデミック・スキルズ

アカデミック・スキルズは、論文作成とプレゼンテーションのスキルを身につけて貰うための少人数制授業である。2005年度に極東証券寄附講座として設置され、以来、毎年開講されている。3名から4名程度の教員で最大20人強の学生を担当する。学生間の相互啓発も期待されている。教員と学生が分け隔てなく学び合い、教え合うという、慶應義塾の標榜する「半学半教」の実践の場でもある。

2015年度には「アカデミック・スキルズⅠ・Ⅱ」3クラス、「アカデミック・スキルズ(英語)Ⅰ・Ⅱ」1クラス(いずれも通年授業、春学期Ⅰ、秋学期Ⅱ)、合計4クラスが開講された。

「アカデミック・スキルズⅠ」では、研究テーマの選び方・絞り方、資料の検索方法などを学び、4000字程度の論文を作成する。「アカデミック・スキルズⅡ」では、「Ⅰ」の成果を踏まえて、その上積みをはかり、8000字程度の論文を完成させる。併せてプレゼンテーションの仕方を考究し実践する。英語のクラスもそれに準ずる。

2015年度の担当教員は以下の通り。火曜5時限が小野裕剛、鎌田由美子、治山純子。水曜5時限が原大地、片山杜秀、渡名喜庸哲。木曜5時限が伏見岳志、熊野谷葉子、小林拓也。火曜2時限(英語クラス)が佐藤望、徳永聡子、ノッター・デビッド、ファロン・ルース。

この授業の最終成果は例年、年度末に開催されるプレゼンテーション・コンペティションと論文コンペティションで示される。各クラスの代表が、プレゼンテーション、若しくは論文で研究成果を問う。プレゼンテーション・コンペティションは2016年2月5日に行われた。審査対象になったのは「アカデミック・スキルズⅠ・Ⅱ」4クラスから出場した各2名、計8名。結果は、金賞が土谷滯さん(理2、火曜クラス)、銀賞が保泉空さん(法1、火曜クラス)。銅賞が石川萌子さん(法2、水曜クラス)と河田航佑さん(経2、木曜クラス)。論文コンペティションの審査は例年通り非公開で行われ、結果発表はプレゼンテーション・コンペティション内でなされた。結果は、金賞が鈴木亮介さん(医1、英語クラス)、銀賞が吉田大喜さん(商1、火曜クラス)、銅賞が松本光司さん(商2、木曜クラス)、審査員特別奨励賞が花里百合子さん(法2、水曜クラス)。なお各クラスの学生による秋学期の論文は、『アカデミック・スキルズ2015 学生論文集』に収載されている。(片山杜秀)



プレゼンテーション・コンペティションの発表の様子

1 設置科目

1-2 生命の教養学

本授業の企画委員長を高桑和巳さんから引き継いだ。授業のコンセプトとオムニバス講義形式に変更はない。コンセプトは①この授業が「生命とは何か、〈生きる〉とはどういうことなのか」という問いから始まる知的探究への誘いとして構想されており、②特定の学問領域に偏ることなく思考の材料を広く求め、各領域の研究成果に十分な敬意を払い、そこから獲得された雑多な材料をもとに新たな知の組織を工夫しようとする態度を「教養」と考え、受講生の「教養」を涵養するための材料と場を提供することである。

本年度のテーマを「食べる」としたところ、これまででおそらく最多の90余名の受講者を得た。本学内外からお招きした講師のお名前と講義題目は以下の通りである：山下範久（立命館大学国際関係学部教授）「ワインにみるグローバリゼーション」、島村菜津（ノンフィクション作家）「『スローフード運動』とは何か」、小泉武夫（東京農業大学名誉教授）「発酵食品の神秘」、野口和行「『食べる』を『体験する』」（本学体育研究所准教授）、池上俊一「食から見るイタリア史」（東京大学大学院総合文化研究科教授）、山本道子「日本人の食べ方・味わい方から見る日本の文化」（村上開新堂代表取締役、料理研究家）、生源寺眞一（名古屋大学大学院生命農学研究科教授）「日本の食料と農業」、勝川俊雄「魚はいつまで食べられる？」（東京海洋大学産学・地域連携機構准教授）、勝川史憲（大学スポーツ医学研究センター教授）「生体のエネルギー出納バランスと体重コントロール」、大道寺慶子（本学文学部非常勤講師）「東アジアの食餌：古代の食養生から現代のデトックスまで」、比嘉理麻（沖縄国際大学総合文化学部社会文化学科専任講師）「食べられるブタ、嫌われるブタ、愛でられるブタ——沖縄のブタ食文化から考える」。

受講生は、各講義に啓発され、別のトピックを扱った複数の講義が網の目状に接続し「教養」が形成されていく知的刺激を経験できたと判断している。講義後の質疑の時間では本質を突いた質問が学生から数多く出され講師を驚かせることが珍しくなかった。例年通り、講義録の公刊が行われる。

なお、授業運営にあたって若干の変更を加えた部分がある。受講生の多くを占める新入生が、講義と関連する書籍等をすぐに探せるようにするため日吉メディアセンターのご協力を得て「情報リテラシー

セミナー」を開いたこと、さらにそうして受講生が見つけた文献を期末試験のなかで正しく引用あるいは参照するように課して徹底することである。期末試験の答案をみるとその試みは成功したと判断している。こうした試みは引き続き行い、「生命の教養学」をいっそう発展させていく所存である。

（赤江雄一）



野口和行氏（5月8日）



勝川史憲氏（6月19日）



大道寺慶子氏（6月26日）

Ⅱ 教育開発関連プロジェクト

1 設置科目

1-3 身体知：創造的コミュニケーションと言語力

2015年度「身体知」声と記憶

通信教育課程の学生と通学生がともに学ぶ夏期集中講座である。今年は「声」と「記憶」に着目して文学作品と他者との対話から得た着想を自らの創作へつなげ、最終日に成果発表朗読会を行った。取り扱った文学作品は、ジェイムズ・ジョイスの『ダブリンズ』の最終章「死者たち」、ジェニー・ホロウェルの「あなたを含めて何もかも歴史」、そしてスティーヴン・ミルハウザーの「だんだん近づいていく」の3篇である。後者の2編は未訳の作品のため、ファシリテーターが訳したものを朗読を通して各自で言葉を直していく、という方法をとった。

授業ではまず作品を朗読し、自分の声、他者の声に耳を傾け、いかに朗読によって解釈が異なってくるのかを体感した。続いて語ること、聴くことを通して他者の記憶から新たな創作へとつなげる試みに移った。年齢や性別、経験の異なる他者を受け入れ、創作を通して他者のみならず自己の物語とする行為は、事象の解釈のもう一つのあり方を提示する。作品は朗読会を通して聴衆とシェアした。

(横山千晶)



空間に自分の声を響かせる



自分の想いを絵にしてみる



同じ作品も外で読むことで解釈が変わる



最後の成果発表会

1 設置科目

1-4 身体知・音楽

「身体知・音楽Ⅰ・Ⅱ」は、住友生命保険寄附講座であり、音楽を通じて築き上げてきている歴史および文化を、実践を通じて学ぶことを目的としている。成果発表は、主に公開演奏会という形で行っており、演奏会には、社会還元の意味合いをも持たせてある。2015年度は、「身体知・音楽Ⅰ・Ⅱ」に加え、株式会社龍角散・公益財団法人かけはし芸術文化振興財団・株式会社白寿生科学研究所からの寄付金によって「発展・声楽クラス」を実験授業として立ち上げ、「身体知・音楽Ⅰ・Ⅱ」の声楽クラスに参加している学生に対して、さらなる知識を得る場を設けた。この実験授業は、2016年度には株式会社龍角散寄附講座「身体知・音楽Ⅲ・Ⅳ」として開講した。

2015年度は、成果発表演奏会として日吉において計3回開催している。具体的に次の日程で行った。

- ① 2015年7月5日：慶應義塾大学コレギウム・ムジクム・古楽アカデミー演奏会「ヴェネチアからの発信～古楽器で奏でる17世紀のイタリア器楽～」
- ② 2015年10月24日：慶應義塾大学コレギウム・ムジクム・アンサンブル・ミリムコラボレーション企画、「バッハ・モテット、シュッツの複合唱」、および③ 2016年1月10日：慶應義塾大学コレギウム・ムジクム古楽アカデミー・オーケストラ演奏会「ドイツ管弦楽組曲の響き」。また、声楽クラスにおいては、2016年2月に岩手県花巻市および大槌町において、復興支援の一環として演奏会を現地で催した。

「身体知・音楽Ⅰ・Ⅱ」は、専門的な音楽訓練を行う授業として設置され、教養教育の一環の音楽芸術の良き理解者を、未来社会に派遣するということを目指している。専門の音楽家と協同しながら学び、音楽が人間の身体を通じて伝えてきた身体知と文化の歴史を、身をもって学生たちに身に付けてきてもらっている。また、この授業は開講当初から、継続的な学習ということを重視し、複数年にわたり授業に参加する学生が多くいる。これは、参加者が音楽の理解をより深めているということだけでなく、後から授業に入ってきた学生を指導するというような好循環が生まれてきている。地域貢献という視点からは、活動は確実に浸透しており、必ずしも知られているとはいえないが歴史的に重要な音楽作品の価値を、一般の方々に伝えてきている。

最後に、授業を通じ学生たちは、それぞれが果たしている役割を認識し、自分がどのような行動をと

れば、全体として最も良いパフォーマンスを挙げることができるかを考えられるようになってきている点を挙げておく。これは人間力の養成そのものであり、これこそが、教養研究センターが目指してきた「身体知」であるといえる。

(石井 明)



Ⅱ 教育開発関連プロジェクト

1 設置科目

1-5 身体知・映像

2015年度の身体知・映像クラスも春のオーディションで始まり、翌年の春の学生作品上映会で幕を閉じた。このクラスを教えていると、ついT. S. エリオットの詩「四重奏曲」の一節を思い起こす。「わたしたちが始まりと思うものは、しばしば終わりなのだ」と。

春のオーディションは、この大人気のクラスに入るためのいわば面接だが、毎年三倍近い倍率をくぐり抜けたツワモノたちは、さすがに身体能力がひときわ優れていて、もうこちらで教えるものはないのでは、と思われるほどだ。彼らはすでに映画を作り出す想像力を備えている。「始まり」のなかに「終わり」が見えるというのは、そういうことだ。

しかし、やはり「終わり」は「始まり」ではない。一年間の授業の総仕上げとなる学生作品上映会は、学生にとっても、教師にとっても、感きわまるものだった。「君というアネモネ」と「夢うつつ」という二つの美しい短編映画がスクリーンに投影されているのを見ていて、そこに授業のなかで、あるいは授業の外で起きた、さまざまな化学反応が見えてくる。文字通り、あるいは映像通り、学生のみなさんの一年間の成長がそこに写っている。

(佐藤元状)



2015年度 極東証券寄附講座
「身体知・映像」映画上映会
一上映作品
第1部:「TRUNKS」「私の顔は何度まで?」「チケットの悲劇」
第2部:『君というアネモネ』『夢うつつ』
入場無料・どなたさまもお誘い合わせの上、会場に足をお運びください!
4.6水
15:00-17:00
日吉キャンパス来客舎
シンポジウムスペース
主催: 慶応義塾大学 教養研究センター

2 実験授業

2-1 庄内セミナー

●参加メンバー、事務担当部門

大出 敦(法・教セ副所長)、工藤多香子(経・教セ副所長)、種村和史(商)、津田真弓(経)、羽田功(経) 小磯勝人(慶應義塾大学出版会)、傳 小史(教セ)

●目的、背景

教養研究センターでは、山形県鶴岡市にある慶應義塾大学鶴岡タウンキャンパス(以下、TTCK)を拠点として2008年度以来、「庄内セミナー」を開催している。2015年度からは、それまでの未来先端基金公募プログラムだったものから、教養研究センターの経常費で行うセンター独自の事業となった。本セミナーの目的は、「教養力」、すなわち「自立・自律力」と「社交力」の涵養を通じた「教養」の基礎体力作りにある。今回の主要な趣旨は、①鶴岡市、TTCKを拠点として新たな体験型の「学びの場」を開発すること、②出羽三山など豊かな自然に囲まれ、歴史・文化・自然・人の織りなす多彩な「生命」に恵まれた庄内地方で生と死について思索を深める機会を設けること、③学部生、大学院生、社会人など複数の世代が地元と交流することで、多様な視点が生み出され、その結果、議論と思索に厚みを持たせ、重層的な生命観を紡ぎ出すことの三点にある。

●活動内容

2015年度は以下の活動を行った。

- (1) 事前説明会：8月3日実施
- (2) 事前課題：【テーマ】生きることの意味を問うのレポート提出。
- (3) 合宿セミナー：8月28日から8月31日(3泊4日)。プログラム概要は次の通り。

①「生命」に関するマインドマップの作成。

②庄内文化論：酒井忠久氏(致道博物館館長)による「庄内文化論」と題したオープニング講演。東山昭子氏(鶴岡総合研究所顧問)による「庄内にまなぶいのち」と題した講義・議論。松ヶ岡開墾場見学、致道館における富樫恒文氏(庄内藩藩校致道館統括文化財保護指導員)の指導による庄内論語の素読体験。

④日本人の死生観：即身仏拝観。佐藤弘明氏(注連寺住職)による解説。三村将氏(医学部)による「人は死ぬとき何を思うか——精神科からの問題提起——」と題した講演・議論。

⑤修験体験：山伏による解説と指導によって一日修験体験。山内志朗氏(文学部)による「湯殿山一世行人における生と死の作法」と題した講演・議論。

⑥先端生命科学研究所見学：「生命」にまつわる最先端研究の体験・対話と議論。

- (4) 事後課題・報告書(レポート)の作成：【テーマ】(生きることの意味を問う)について、庄内セミナーを通じて体感・体験したこと、考えたこと、話し合ったことなどを基礎にして、各自の「生命観」「死生観」「身体観」などについて論述し、体験と思索を言語化する。課題レポート集を兼ねた報告書の発行。
- (5) 関連企画の実施：日吉図書館、大学生協(日吉)の協力を得て、6月に関連書籍の展示、学生健保主催の朝食サービスで庄内米を提供。

●成果

- ①羽黒修験・即身仏などに見られる伝統的な死生観からTTCKの先端生命科学研究所の活動に見られる先端的な「生命」観に至る広範な「学び」体験。
- ②地元との交流によって、参加者の「地方・地域」への眼差しの広がりとそのによる相対的な視点の獲得。
- ③社会人や多様な学部と学年の学生参加による世代間交流の体験およびグループワークによるコミュニケーション力の涵養。
- ④フィールドワークを通じた体験的な「学び」の重要性の認識。
- ⑤対話と議論を通じた言語化と発信能力の向上。

●参加学生の声

- ・「『生きる』ということについて真剣に考えずに今まで私は生きてきました。しかし、『生きるとは何か』という根本的な問いを見出しながら、この庄内における地で過ごししながら答えを出すことで、今後どういった生き方をしてゆけば良いかという進路が見出せました。」(文学部)
- ・「実際に山伏や素読を体験することで、今まで感じなかったこと、考えなかったことに気がつくことができた。」(経済学部)
- ・「来て本当によかった。帰るのが惜しい。このタイミングだからこそこの学びであった。」(文学部)

●活動内容の広報状況

- ①地元紙の報道：「庄内日報」2015年8月4日号の東山昭子氏の記事「庄内に学ぶ『生きることの意味』」で、「庄内セミナー」について言及。また同年8月30日号、9月1日号に写真入りの「庄内セミナー」の記事が掲載される。
- ②刊行物：学生によるレポートを掲載した『「庄内セミナー」報告書』を刊行。

(大出 敦)



マインドマップ作成



山伏体験

教養研究センター主催

第6回 庄内セミナー

テーマ「生きることの意味を問う」
参加申込みは6/8(月)～7/20(月)まで！



【期間】 8月28日(金)～8月31日(月) 3泊4日
【場所】 山形県鶴岡市(鶴岡タウンキャンパス他)
【募集人数】 30名 ※応募理由等を考慮し、定員を超えた時点で締切ります
【募集対象】 学部学生・大学院生・社会人
【参加費用】 2,000円(社会人10,000円)
(現地までの往復交通費は自己負担)
☆現地集合・現地解散となります
【内容】 ミニ山伏体験・講義と対話・地元との交流を通して庄内地方の歴史・文化・自然を体感して「生命」をめぐる幅広い「学び」を体験します
詳細は教養研究センターのWebサイトで！
<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/shonai/>
問い合わせ先: toiawase-lib@adst.keio.ac.jp




講演(東山昭子氏)



関連図書展示

21

活動報告

情報の教養学講座シリーズ 第1回
慶應義塾大学教養研究センター主催

歴史の転換期と報道の使命

4・17
岸井成格

講師：岸井 成格（毎日新聞社特別編集委員）
日時：4月17日(金) 16:30～18:00
場所：日吉キャンパス来往会1階 シンポジウムスペース
対象：塾生・教職員（無料）
問い合わせ：toiawase-lib@adst.keio.ac.jp

今、世界も日本も「文明の岐路」に立つと言われるほど歴史の大きな転換期を迎えています。「イスラム国」（IS）など、テロ。武裝勢力が「国家崩壊」の時代に増殖しています。世界の秩序に大きな異変、激震変動が始まっています。

一方、「環境問題」も年々深刻になっています。国連のIPCCは「今世紀末には人類は生存の危機に陥る可能性」を指摘、警鐘を発しています。

そうした激変する時代における報道の役割・使命とは何か？をともに考えます。

毎日新聞社特別編集委員、池田正幸、元読売新聞副社長、政治部部長、シニアエディター、1985年度「サンデーモーニング」コメンタリーコーナー（ニュース21）アンカー、04年度まで。

1983年慶應義塾大学法学部法律学科卒業。同年、毎日新聞に入社（専任主幹）。1997年毎日社会部勤務。「環境版」名称以降の一人。

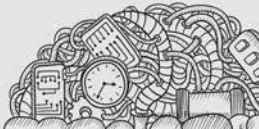


 @KeioEarning
<http://ice.lib-arts.he.keio.ac.jp>



**脳を知り
脳を治す**

講師：牛場 潤一 (理工学部准教授)
日時：5月13日(水) 16:30～18:00
場所：日吉キャンパス来往倉1階
シンポジウムスペース
対象：学生・教職員 (無料)
問い合わせ：toiawase-lib@adst.keio.ac.jp
@KeioLearning
 <http://ice.lib-arts.keio.ac.jp>



講師：牛場 潤一（理工学部准教授）
 日時：5月13日(水) 16:30～18:00
 場所：日吉キャンパス来往舎1階
 シンボジウムスペース
 対象：聴生・教職員（無料）
 問い合わせ：toiwase-lib@adst.keio.ac.jp
 @KeioIearning
 <http://lce.lib-arts.h.keio.ac.jp>



講師：牛場 潤一（理工学部准教授）
 日時：5月13日(水) 16:30～18:00
 場所：日吉キャンパス来往舎1階
 シンボジウムスペース
 対象：聴生・教職員（無料）
 問い合わせ：toiwase-lib@adst.keio.ac.jp
 @KeioIearning
 <http://lce.lib-arts.h.keio.ac.jp>



講師：牛場 潤一（理工学部准教授）
 日時：5月13日(水) 16:30～18:00
 場所：日吉キャンパス来往舎1階
 シンボジウムスペース
 対象：聴生・教職員（無料）
 問い合わせ：toiwase-lib@adst.keio.ac.jp
 @KeioIearning
 <http://lce.lib-arts.h.keio.ac.jp>



(高田眞吾)

情報の教養学講演シリーズ 2015年度第3回
慶應義塾大学教養研究センター主催

人類は経済的に豊かになり
長生きになり
教育的にも豊かになってきた
これは人類全体にはまだることではなく
地球にはそこから取り残された人々もいる
そのような人々の状態を貧困という
その現状をデータから確かめてみよう

貧困を測る

6・17
Kazushige Shimpo
新保一成

講師：新保 一成 (商学部教授)
日時：6月17日(水) 16:30～18:00
場所：日吉キャンパス来客1階
シンポジウムスペース
対象：塾生・教職員 (無料)
問い合わせ：toiawase-lib@adst.keio.ac.jp

<http://ice.lib-arts.hc.keio.ac.jp>

情報の教養学講演シリーズ 2015年度第5回
慶應義塾大学教養研究センター主催

日本経済は再生するか

構造変化の現実を理解しよう

11・4
Hiroyuki Kishi
岸博幸

アベノミクス、中国経済の変調など経済については日々膨大な量の報道が行なわれていますが、実はどれも非常に近視眼的なものです。今のままで本当に日本経済は再生するのか、若い世代は将来の安心に向けてどうすべきかを分かりやすく解説します。

講師：岸 博幸 (メディアデザイン研究科教授)
日時：11月4日(水) 16:30～18:00
場所：日吉キャンパス来客1Fシンポジウムスペース
対象：塾生・教職員 (無料)
問い合わせ：toiawase-lib@adst.keio.ac.jp

<http://ice.lib-arts.hc.keio.ac.jp>



情報の教養学講演シリーズ 2015年度第4回
慶應義塾大学教養研究センター主催

歴史は「過去」情報の宝庫です
我々は過去の人間のさまざまな営みを伝えてくれる史料を通して
過去に何が起こったのかを知ることができます
それでは昭和戦前期の歴史を
我々はどうに理解してきたのでしょうか？
戦後70年にあたりあらためて振り返ります

昭和の歴史と戦争を考える

昭和の歴史と戦争を考える

10・23
Fumitaka Kurosawa
黒沢文貴

講師：黒沢 文貴 (東京女子大学教授・軍事学専攻)
日時：10月23日(金) 16:30～18:00
場所：日吉キャンパス 第4校舎独立館D311
対象：塾生・教職員 (無料)
問い合わせ：toiawase-lib@adst.keio.ac.jp

<http://ice.lib-arts.hc.keio.ac.jp>

情報の教養学講演シリーズ 2015年度第6回
慶應義塾大学教養研究センター主催

次世代著作権

激増するコンテンツを握るのは誰か

12・16
Kensaku Fukui
福井健策

人工知能とビッグデータ解析の驚異的な進歩は、オーウェル『1984年』が描いた「機械が人間のためにコンテンツを産出する未来」を確実に現実化しつつある。急速に変容する知の営みとプラットフォーム寡占の中、千ガコンテンツ時代の著作権の動向を俯瞰する。

講師：福井 健策 (弁護士・日本大学芸術学部客員教授)
日時：12月16日(水) 16:30～18:00
場所：日吉キャンパス来客2F大会議室
対象：塾生・教職員 (無料)
問い合わせ：toiawase-lib@adst.keio.ac.jp

<http://ice.lib-arts.hc.keio.ac.jp>

2 実験授業

2-3 日吉学

2013年度から継続している「日吉学」は日吉に学ぶ学生（一貫教育校含む）であれば誰でも受講できる実験授業で、フィールドワークを通して、歴史・地理・自然と多角的に日吉を学ぶ試みである。2015年度は「Deepな日吉を語ろう」と題し、春学期3回、秋学期4回開講した。各回の参加者は10～20名程度だったが、全回出席した大学生が3人いたため、彼らには「日吉学修了証」を授与した。各回のタイトルと開催日は以下の通り。

春学期

第1回「日吉の森で生物多様性デジタルマップを作ろう」(4月25日)

講師：福山欣司(経済学部)、長沖暁子(経済学部)
有川智己(経済学部)

第2回「歩いて、見て、考える、日吉の戦争遺跡」(5月23日)

講師：安藤広道(文学部)、阿久沢武史(高等学校)
第3回「日吉は地図と地上観察で遊ぶとこんなに面白い！」(6月6日)

講師：太田弘(普通部)、高橋傑(普通部)、
坂戸宏太(横浜初等部)、
石川初(政策・メディア研究科)、
皆川典久(東京スリパチ学会会長)



第1回(4月25日)



第2回(5月23日)

慶應義塾大学教養研究センター主催 未来先導基金公認プログラム

2015年度 実験授業「日吉学」

～Deepな日吉を語ろう！～

家とキャンパスの往復だけでは飽き足りないキミ！
日吉の秘境を一緒に探検しませんか？

・・・春学期スケジュール・・・

第1回 2015年4月25日(土) 13:30～17:00
「日吉の森で生物多様性デジタルマップを作ろう」

第2回 2015年5月23日(土) 13:30～17:00
「歩いて、見て、考える、日吉の戦争遺跡」

第3回 2015年6月6日(土) 13:30～17:00
「日吉は地図と地上観察で遊ぶとこんなに面白い！」

集合場所：慶應義塾大学日吉キャンパス 第4校舎日棟2階22番教室
概 要：各回とも、フィールドワーク+グループワーク+質疑・講義を予定しています。
受講資格：監生（中学生～大学1年生、通信学部生）
定 員：30名（※先着順。定員を越えたら申込みを締め切らせて頂きます。）
申し込み：「日吉学」HPより <http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/hiyoshi/>
申込締切：4月24日(金) 12時まで
備 考：参加費無料・雨天決行
お問い合わせ：慶應義塾大学教養研究センター：tokiwase-lib@adst.keio.ac.jp



第3回(6月6日)

秋学期

第4回「楽しい考古学 ― 日吉の遺跡と遺物の楽しみ方を考える ―」(10月17日)

講師：下島綾美(展示プランナー・お菓子作り考古学者)、白鳥兄弟(Y市博物館学芸員・大道芸人考古学者)、安藤広道(文学部)

第5回「めざせ縄文人―日吉の森で食べられる実を探そう―」(11月7日)

講師：福山欣司(経済学部)、長沖暁子(経済学部)、有川智己(経済学部)

第6回「日吉のアーカイブマップを作ろう！」(12月12日)

講師：田村賢哉(OpenStreetMap Japan 事務局)、太田弘(普通部)

第7回「個人のアイデアを融合して革新的なアイデアを生み出すには？」(12月19日)

講師：神武直彦(システムデザイン・マネジメント研究科)

(有川智己)

家とキャンパスの往復だけでは
飽き足らないそのキミ！！
日吉の秘境と一緒に探検しませんか？

Deepな日吉を語ろう！

2015年度 実験授業「日吉学」
慶應義塾大学教養研究センター主催 未来先導基金公募プログラム



秋学期のスケジュール

回	日	時間	内容
第4回	10.17(土)	13:30 ~ 17:00	「楽しい考古学―日吉の遺跡と遺物の楽しみ方を考える―」
第5回	11.7(土)	13:30 ~ 17:00	「めざせ縄文人―日吉の森で食べられる実を探そう―」
第6回	12.12(土)	13:30 ~ 17:00	「日吉のアーカイブマップを作ろう！」
第7回	12.19(土)	13:30 ~ 17:00	「個人のアイデアを融合して革新的なアイデアを生み出すには？」

申し込みは「日吉学」HPから



●集合場所：日吉キャンパス 第4校舎B棟2階22番教室 ●対象：塾生(中学生～大学院生、通信教育課程)
●定員：30名(定員を超えたら締切ります) ●申込締切：第4回は10/15(木)、それ以外は10/28(水)まで
●参加費：無料 ●昼食：各回ともフィールドワークグループワーク、質疑、講義を予定しています
●備考：雨天決行(雨天の場合、開催の有無を前日に連絡します)
●問い合わせ先：toiawase-lib@adst.keio.ac.jp



第4回(10月17日)



第6回(12月12日)



第5回(11月7日)



第7回(12月19日)

3「学び場」プロジェクト

3-1 学習相談 (ピア・メンター)

2008 年度より始まった学習相談の取り組みも、2015 年度で 8 年となった。学習相談の事業は、教養研究センターと日吉メディアセンターの共同事業である「学生の学習環境を整えるプロジェクト」(通称「学び場プロジェクト」)の一環として始まったものである。主として学部生によるレポートの書き方や文献検索のアドバイスをする学習相談を中心として、現在では企画展示、各種セミナー、トークセッションを行っている。

●**学習相談**：2015 年度春学期は 4 月 27 日から 7 月 17 日まで、秋学期は 10 月 1 日から 1 月 15 日まで実施した。実施時間は平日月曜日から金曜日までの 13 時から 18 時まで。学習相談員 (ピア・メンター) の地道な努力の積み重ねにより、2015 年度は前年を上回る 615 件の相談を受けた。

●**企画展示**：学習相談員の相談活動を通して積み上げてきた、学生が大学での学習・レポート作成で直面する共通の問題とそれに対する効果的なアドバイスの仕方に基づいて、メディアセンターで企画展示を行っている。春学期は「ちょっと待ってちょっと待ってお兄さん！正しいスケジュールリングって何ですか？」(6 月 19 日から 7 月 30 日)と題したスケジュールリングをテーマにした展示、秋学期は「思わず発表したくなる！カッコいいスライドを作る方法！」(12 月 14 日から 2 月 8 日)と題したプレゼンテーションの方法についての展示を行った。

●**各種セミナー**：学習相談員によるレポートの書き方をテーマにしたセミナーを春学期と秋学期にメディアセンターで行っている。春学期は全 3 回で、「レポートってなに？今のうちに知っておこう、良いレポートと悪いレポート！」(2 回)、「レポートから論文へ。学術性を見出すポイントを教えます！」(1 回)を実施。秋学期は全 7 回で、「論文って何だ!？」(1 回)、「はじめての書評」(1 回)、「レポートの書き方・発展編」(2 回)、「文献の種類と活用法：人生いろいろ 文献もいろいろ」(2 回)、「レポート提出前の文章見直し法講座」(1 回)を実施。

●**トークセッション**：2013 年度に初めてトークセッションを行って以来、毎年実施しているものであるが、2015 年度は初めて春学期と秋学期の 2 回、実施した。春学期は学習相談員による「後悔しない日吉ライフ～大学で学ぶということ～」(4 月 16 日)というもので、主として新入生を対象に、日吉で

の大学生活について議論を行った。秋学期は湘南藤沢キャンパスで「研究の始め方・続け方——それがお前のやりかたか!？」(12 月 16 日)と題し、SFC の WRC (ライティング&リサーチコンサルタント) のメンバーと学習相談員の合同で実施した。学習相談は、慶應義塾の建学の理念の一つである「半学半教」の精神に則ったものであり、同様の事業は他大学でも見られるが、学部生が学部生にアドバイスを与える仕組みを有している点が、本塾の学習相談の大きな特徴であり、全国的に見ても稀有である。(大出 敦)

2015 SPRING
学習相談
@keiogakushusoud

レポートって何？
高校までの課題とどう違うの？
正しい「引用」ってどうやるの？
Wikipedia じゃダメなの？
書評って何？
課題のテーマってどう決めればいいの？
プレゼン資料ってどう作るの？
論文って本と同じじゃないの？

あなたの疑問、解決します。

レポートや資料作成のノウハウを知る学部生・院生が
学生目線で相談に乗ります。

活動期間 2015 年 4 月 27 日 (月) ～ 7 月 17 日 (金)
活動時間 月～金 13:00 ～ 18:00
活動場所 日吉図書館 1 階 スタディサポート
共 催 教養研究センター・日吉メディアセンター・日吉学生部

2015 Autumn
学習相談
~Study Advice 2015, Autumn~

レポート・プレゼンの疑問 解決します
どうすれば... なるほど!

日吉図書館 1F
スタディサポートへ

2015 Autumn Term Schedule
(Oct. 1 ~ Jan. 15)

	Mon	Tue	Wed	Thu	Fri
13:00	商 2	院生	院生	法 2	院生
14:30	院生	院生	院生	院生	院生
14:30	院生	院生	法 2	法 3	法 2
16:00	院生	院生	院生	院生	院生
16:00	院生	院生	院生	院生	院生
18:00	院生	院生	院生	院生	院生

詳細は <http://www.hc.kit.edu.ac.jp/studyadv/consultation.html> にて

Sponsored by...
教養研究センター・日吉メディアセンター・日吉学生部
@keiogakushusoud



Ⅱ 教育開発関連プロジェクト

4 教員サポート

4-1 研究の現場から

2015年度も例年通り春学期に1回、秋学期に2回の計3回開催した。いずれの回もほぼ満席となる盛況で、参加者による活発な議論が展開された。各回の概要は以下のとおり。

■第1回 2015年6月17日(水)

講師：赤江雄一(文学部)

「民衆教化と学問知——中世後期ヨーロッパの説教」

講師：池田真弓(理工学部)

「『健康の庭』——15世紀印刷本草の挿絵からみえること」

文学部の赤江先生は、民衆教化が主要な目的となる第四ラテラノ公会議以降、聖職者は学識をもちつつ民衆にわかりやすく説教することが不可欠となったことを指摘し、イメージと記憶術の利用や聖書の引用方法にその成功の秘訣があることを示してくださった。理工学部の池田先生は1485年出版の本草『健康の庭』を取り上げ、その挿し絵には伝統と写実の混在が見られることから、専門家ばかりでなく非専門家の好奇心にも訴える本となっていることを論じた。

■第2回 2015年10月14日(水)

講師：納富信留(文学部)

「哲学を立ち上げる——プラトン対話篇を読む営みから」

講師：新井和広(商学部)

「聖なる血筋の記録——インドネシアと南アジアの事例」

プラトン研究の第一人者であられる文学部の納富先生は、ご自身の著書を紹介してくださりながら、哲学を人間が自覚的に生きるあり方ととらえ、いかにして生きた哲学を立ち上げるかという問いかけに参加者を誘った。商学部の新井先生は、長年継続してこられたインドネシアを中心としたフィールドワークで調査していっしょに、預言者ムハンマドの子孫たちが記録を続け保存している系図を紹介してくださった。現代社会でムハンマドの存在をリアルに感知させるものとしての系図の意義と、それに対する子孫や信者の情熱が伝わる発表だった。

■第3回 2015年12月9日(水)

講師：津田真弓(経済学部)

「柳桜亭江戸廻花也——長州藩主毛利斉元の狂歌遊び」

講師：北川千香子(商学部)

「オペラ／音楽劇における沈黙の諸相」

江戸文学の専門家である経済学部の津田先生は、留学での研究成果を発表してくださった。江戸後期に狂歌摺物を多く制作した花也の正体が長州藩主毛利斉元であることを明らかにし、江戸時代に身分を超えた文化交流があったことを指摘された。また、海外の美術館・研究機関での調査で新たな発見があり、江戸文学史への大きな貢献が期待できるとのお話だった。商学部の北川先生はワグナーの作品における沈黙に着目し、なかでも「時間の空間化」によって沈黙を想起させる手法が現代音楽に通じることを解説してくださった。音楽がご専門の先生方も加わり、多角的な視点から音楽をめぐる考えが飛び交い、刺激的で建設的な議論が展開された。

(工藤多香子)

研究と交流の場
「研究の現場から」 第十三弾

同僚の面白い話
 刺激的な研究・教育の話
 おいしい○○○がある
 ～サロン・日吉 円卓の会へご招待～



赤江 雄一 (文・准教授)

「民衆教化と学問知
 ——中世後期ヨーロッパの説教」

池田 真弓 (理・専任講師)

「『健康の庭』——15世紀印刷本草の
 挿絵からみえること」

○日時：6月17日(水) 18時15分～

○場所：来往舎1階 101/102

○対象：教職員

※申し込み不要、ご自由にお立ち寄りください。

主催：教養研究センター

4 教員サポート

4-2 教員サポート講演会

現在、大学を巡る研究・教育環境は大きな転換期を迎えている。それにともない大学生の生活環境や精神環境も一昔前と比べてみても、大きく変化しており、教職員はこうした新たな状況に日々直面しているのが、現状である。一方、大学教員も研究・教育に対する社会の要請の変化に応じて、新たな取り組みに挑戦しなければならない状況に置かれている。こうした大学の研究・教育環境の変化、学生の直面する問題に対して、慶應義塾内の各部署・部門は、さまざまなノウハウを蓄積してきているが、うまく連携できていない場合も多々ある。教養研究センターでは、さまざまな問題の解決法やそのための設備を随時紹介することで、それぞれの部署・部門、あるいは教職員が問題解決の連携を図り、ネットワークを構築できるようにする目的で、「教員サポート」と題する講演会、ワークショップを随時開催している。

2015年度は、これまでも開催し、参加者からは好評であった学生相談室との共催による学生の心の問題を扱った講演会を開いた。2016年1月19日に日吉学生部（学生相談室）との共催で、平野学氏（本塾文学部非常勤講師・学生相談室カウンセラー）による「学生相談室のカウンセラーとして思うこと——今を生きる学生達への支援のために——」と題した講演が行われた。講演は大学におけるカウンセリングとはどのようなものか、ということの解説から始まり、今の塾生が抱える問題や、日吉、三田、信濃町、矢上、SFC、芝共立のそれぞれのキャンパス特有の心の問題などが説明され、その対応策が示された。さらに文学部の授業で学生の心の問題の解決するために平野氏が実際に実施している試みが紹介された。

講演後の質疑応答では、教員、職員から教室や窓口で実際に対応した学生に関する質疑などが寄せられた。課題としてあがったことは、現在、塾内には学生部、学生相談室、保健管理センター、ハラスメント防止委員会などさまざまな窓口があり、問題を抱えた学生に対応しているが、個人情報の保護の関係で情報を共有するのは難しいことであった。しかし何らかの形でそれぞれの部署・部門が連携して学生に対応した方が望ましく、そのための仕組み作りをする必要性が参加者間で確認された。なおこの平野氏の講演会の模様の詳細についてはCLAアーカイブズ32を参照されたい。

（大出 敦）

IA
P&A

教員サポートワークショップ

学生相談室のカウンセラーとして思うこと ——今を生きる学生達への支援のために——

塾の学生相談に携わって25年。現在も5つのキャンパスを往復する中、学生達とどうかかわっていきべきか、教職員として考えさせられることも多い。学生相談という仕事、そして今後への課題等についても触れながら、お話してみたい。

2016年1月19日（火）18:15～20:00
日吉キャンパス 来往舎シンポジウムスペース

講師: 平野 学氏
学生相談室カウンセラー(臨床心理士)、文学部非常勤講師
慶應義塾大学大学院社会学研究科修士課程修了後、同医学部精神神経科助手を経て現職。
(社)日本臨床心理士会常務理事、(社)日本心理臨床学会理事、日本脱カルト協会理事、他。

■■対象者：慶應義塾の教職員

教養研究センター・日吉学生部（学生相談室）共催
お問い合わせ：toiawase-lib@adst.keio.ac.jp




平野学氏

Ⅲ 交流・連携関連プロジェクト

1 日吉行事企画委員会 (HAPP)

日吉行事企画委員会 (HAPP) は、春学期は主に新入生歓迎行事、秋学期は公募企画行事を行っている。新入生歓迎行事は、HAPP が催し物を企画している。それぞれのイベントは、主として依頼型のプロジェクトで、第一線で活動するアーティストや地域住民を巻きこむものである。その一方で、秋学期の公募企画では、塾生・教職員から企画を募集し、応募された企画の中から HAPP が、審査の形で選抜を行う。企画の募集は、新年度開始後行い、綿密な企画書を提出してもらった後、夏休み前までには、選考を終了する。主催者として HAPP は、①安全であること、②大学として行う価値のあるものを開催することの2点について常に留意している。

2015 年度の新入生歓迎行事は、前年に続き、舞踏公演や各種講演会などを主催した。新入生歓迎行事としては、次の8つを主催した。① 2015 年4月7日～13日、「大学体育施設紹介と体力測定&プール開放」、② 2015 年4月24日、大野慶人舞踏公演「花と鳥：内部と外部」、③ 2015 年4月28日、講演会「物語の世界」「『ガリヴァー旅行記』の楽しみ方——文学、絵画、映画、そして人間理解」(講師：原田範行)、④ 2015 年5月8日、講演会「ことばの世界」「軽蔑的即席造語の二つの型」(講師：岩崎英二郎)、⑤ 2015 年5月9日、「塾長と日吉の森を歩こう」、⑥ 2015 年5月19日、「ゲキ×シネの世界〈罇腰城の七人〉」、⑦ 2015 年7月5日および9月26日、「日吉音楽祭2015」、そして⑧ 2015 年7月6日、「FIFA WOMEN'S WORLD CUP カナダ2015 決勝 日本代表を応援しよう！」。

2015 年度の公募企画は、次の6つであった。① 2015 年10月10日、「最後の吉原芸者の記録～GEISHA とは何かを学ぶ講演と展示～」、② 2015 年10月19日、「性の多様性を考える講演とディスカッション」、③ 2015 年10月26日～10月31日、「In the Cloud, On the Cloud ～ Sustainable Pavilion in Hiyoshi ～」、④ 2015 年11月2日、「8 Hands' Piano Performance vol. 2」、⑤ 2015 年12月1日、「たかまつななの笑えて学べるニュース～国際協力編～」、そして⑥ 2015 年12月12日、古典落語と演劇「芝浜」。

企画を実施するにあたり、2011 年度に再改訂した以下の理念に基づき企画を実施した。新入生を中心に全学生を対象として、さまざまな企画を通じて多様な「知」の在り方を提示し、大学のみならず生涯にわたる「学習」の意味と可能性を考える機会を提供

することを目指す。各種行事は「心と体と頭と」を総合テーマとし、(1) 知識・言語表現偏重型学習からの脱却、(2) 学生・教職員による一体型の活動の展開、(3) 地域・社会への大学・キャンパスの開放の3点を目指としている。(石井 明)



最後の吉原芸者の記録
— GEISHA とは何かを学ぶ講演と展示 —

〔春の新生歓迎行事〕

NO.	企画名	日程 / 場所
1	新生歓迎「大学体育施設紹介と体力測定 & プール開放」	4月7日(火)～13日(月) 10:45～14:30 (土日除く) 陸上競技場・協生館体育施設
2	新生歓迎行事 大野慶人舞踏公演 「花と鳥：内部と外部」	4月24日(金) 18:15～〔開場 17:45〕 来往舎 イベントテラス
3	新生歓迎講演会〈物語の世界〉 『『ガリヴァー旅行記』の楽しみ方——文学、絵画、映画、そして人間理解』	4月28日(火) 18:15～19:45 来往舎 シンポジウムスペース
4	新生歓迎講演会〈ことばの世界〉 「軽蔑的即席造語の二つの型」	5月8日(金) 15:00～16:30 〔開場 14:30〕 来往舎 大会議室
5	「塾長と日吉の森を歩こう」	5月9日(土) 14:00～ まむし谷(散策)
6	新生歓迎行事「ゲキ×シネの世界〈髑髏城の七人〉」	5月19日(火) 17:00～20:45 〔開場 16:30〕 協生館 藤原洋記念ホール
7	「日吉音楽祭 2015」	7月5日(日)及び9月26日(土) 協生館 藤原洋記念ホール
8	「FIFA WOMEN'S WORLD CUP カナダ 2015 決勝 日本代表を応援しよう！」	7月6日(月) 7:00～10:30 協生館 藤原洋記念ホール

〔秋の公募企画〕

NO.	企画名	日程 / 場所
1	「最後の吉原芸者の記録 — GEISHA とは何かを学ぶ講演と展示 —」	講演 10月10日(土) 展示 10月5日(月)～10日(土) 来往舎 シンポジウムスペース、イベントテラス
2	「性の多様性を考える講演とディスカッション」	10月19日(月) 18:15～19:45 来往舎 シンポジウムスペース
3	「In the Cloud, On the Cloud ～ Sustainable Pavilion in Hiyoshi ～」	10月26日(月)～31日(土) 10:00～17:00 来往舎 イベントテラス前 屋外広場
4	「8 Hands' Piano Performance vol. 2」	11月2日(月) 18:30～19:30 来往舎 イベントテラス
5	「たかまつななの笑えて学べるニュース～国際協力編～」	12月1日(火) 19:00～21:00 来往舎 シンポジウムスペース
6	古典落語と演劇「芝浜」	12月12日(土) ① 13:00～14:00 ② 16:00～17:00 日吉メディアセンター 1F ラウンジ



祝！なでしこジャパン決勝進出！！
パブリック・ビューイング開催決定！！

平成27年7月6日(月)
日吉キャンパス協生館2階 協生館2階ホール
7:30 開演
7:50 日本代表の戦いを振り返る
8:00 チックオフ
※事前申し込み不要、参加自由(定員400名)
※観戦の妨げとなる行為は厳禁
※投票のある場合は、10:00まで
※自由に退席退出が可能です



E-mail: enjoy_sports@ml.kaiyo.jp



FIFA WOMEN'S WORLD CUP カナダ 2015 決勝 日本代表を応援しよう！

8 Hands' Piano Performance vol. 2
4人のピアニストによるピアノ手遊演 40本の指が奏でる大アンサンブル～
協生館2階2015年度秋のP&P公演
Reynolds Art & Performance Project

J.S.バッハ：ブランデンブルク協奏曲第3番 BWV1044
グロームス：ハンガリー舞曲
ガーシュイン：ボーギー・ワルツ
ほか

2015年11月2日(月) 18:30開演 (18:00開場)
来往舎1階イベントテラス
協生館2階2015年度秋のP&P公演
アコースティック・ジャズ・ロック・現代音楽・現代音楽・現代音楽
協生館2階2015年度秋のP&P公演

入場無料
※観覧券は不要です
※観覧券は不要です

出演者
佐々木 大
佐々木 大
佐々木 大
佐々木 大
佐々木 大

主催 協生館
後援 協生館

2 日吉キャンパス公開講座 運営委員会

2015 年度日吉キャンパス公開講座は、納富信留委員長の主導のもと、秋山豊子教授の企画によって立案された。秋山教授は、「色と紋様の世界」というタイトルによって、我々をとりまく色彩を、人文学、社会学、自然科学の様々な面から追求する講座を設計された。このテーマは、好評であった前年の「言葉と想像の翼」以上の人気を博し、かつてない早さで制限人数に達した。様々なアプローチで多様な「色と紋様の世界」を取り上げたテーマ設定に対する関心の深さは今後の企画立案の参考とすべきであろう。当然ながら、この好評価は、テーマ設定の適切さのみならず、講師陣の深い学問に裏打ちされた魅力的な講義あつてのものである。講義を引き受けて下さった塾内外の方々に心より感謝いたします。

【2015 年度】「色と紋様の世界」

概要：私たちは多彩な色彩に囲まれて生活しています。空の青、夕焼けの赤、虹の七色、花や緑の木々に癒され、果実の色で食欲を感じ、蝶や昆虫、魚や鳥や宝石など生物や自然の色に魅了されています。また、化粧やファッションの色に悩み、さまざまな生活用品に至るまで快適性と好みにより、色を選択しています。文学や音楽の中にも多彩な「色」があります。今回は様々なアプローチで多様な「色と紋様の世界」を取り上げます。多彩な「色はいろいろ」を楽しんでください。

講座は土曜開講、各回 90 分×2 コマ、全 8 回、受講申込は全 8 回セット（受講料 8,000 円）とし、定員 300 名に対し受講者数 400 名、全回出席者数 128 名（32%）、平均年齢は 61 歳（最高齢 88 歳、最年少 15 歳）であった。

各回の詳細は以下の通り。

10 月 3 日

- 3 時限 「色の魅力と不思議」
鈴木恒男（慶應義塾大学名誉教授）
- 4 時限 「動物の体色と生きる戦略」
秋山豊子（法学部教授）

10 月 10 日

- 3 時限 「浮世絵の『黒』——絵画と版画の墨使い」
内藤正人（文学部教授）

慶應義塾大学日吉キャンパス公開講座（全8回）

色と紋様の世界

2015年
10月3日(土)
12月5日(土)

私たちは多彩な色彩に囲まれて生活しています。空の青、夕焼けの赤、虹の七色、花や緑の木々に癒され、果実の色で食欲を感じ、蝶や昆虫、魚や鳥や宝石など生物や自然の色に魅了されています。また、化粧やファッションの色に悩み、さまざまな生活用品に至るまで快適性と好みにより、色を選択しています。文学や音楽の中にも多彩な「色」があります。今回は様々なアプローチで多様な「色と紋様の世界」を取り上げます。多彩な「色はいろいろ」を楽しんでください。

講座内容 ① 3時限目(13:00~14:30) ② 4時限目(14:45~16:15) 毎週土曜日開催	
① 色の魅力と不思議	鈴木恒男 慶應義塾大学名誉教授
② 動物の体色と生きる戦略	秋山豊子 慶應義塾大学法学部教授
① 浮世絵の「黒」	内藤正人 慶應義塾大学文学部教授
② 玉虫色の秘密と構造色	吉岡伸也 慶應義塾大学工学部准教授
① 古典文学の色づかい	津田真弓 経済学部教授
② ヴェネツィア絵画の色彩	荒木文果 理工学部専任講師
① 時を紡ぐ新たなモノづくり『タイムアクシスデザイン』——色彩・テクスチャ、その移ろいの一考をそえて	松岡由幸 理工学部教授
② 色彩の現場から	千住 博 日本画家、京都造形芸術大学・東北芸術工科大学「芸術学舎」学舎長
① 化粧と色	吉川拓伸 株式会社資生堂
② 色と紋様で織る『和装のデザイン』	本谷新子 慶應義塾大学文学部准教授
① 源氏物語の色と紋様	古岡幸雄 奈良国立博物館
② 多様な色の見え方に配慮した「カラーユニバーサルデザイン」	伊藤 啓 慶應義塾大学理工学部教授
① 「夢の音いっ」用紙にこめられた想い	藤元幸久 慶應義塾大学文学部准教授
② 日本に伝えたインクとペルシアの染織品の色と紋様	鎌田由美子 慶應義塾大学文学部准教授
① 17・18世紀の装束に見る色と	石井 明 慶應義塾大学文学部准教授
② 植物学と庭園と色彩	前田富士男 慶應義塾大学文学部准教授
※10月24日、11月21日は休講となります。	
募集要項（講座もご覧ください）	
募集対象 社会人ほか 募集定員 300名（申込者順受付） 定 価 受講料 8,000円（税込） 受付期間 2015年7月25日（土）～9月25日（金）（必着） 受 取 料 8,000円（税込） 申込方法 郵送（郵便セラー）宛（〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1） 又は、ファックス、E-mailにて利用の場合は、郵便番号・住所・氏名（ふりがな）・年齢・性別・電話番号・職業を明記の上、下記宛てにお申込みください。 〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1 慶應義塾大学日吉キャンパス公開講座事務局 TEL:045-563-3078 Fax:045-563-3079 E-mail:front2015@edu.keio.ac.jp URL: http://lib-arts.keio.ac.jp/ 授業研究センター	

- 4 時限 「玉虫色の秘密と構造色」
吉岡伸也（東京理科大学准教授）

10 月 17 日

- 3 時限 「古典文学の色づかい——描写と見立て」
津田真弓（経済学部教授）
- 4 時限 「ヴェネツィア絵画の色彩」
荒木文果（理工学部専任講師）

10 月 31 日

- 3 時限 「時を紡ぐ新たなモノづくり『タイムアクシスデザイン』——色彩・テクスチャ、その移ろいの一考をそえて」
松岡由幸（理工学部教授）
- 4 時限 「色彩の現場から」
千住 博（日本画家、京都造形芸術大学・東北芸術工科大学「芸術学舎」学舎長）

11 月 7 日

- 3 時限 「化粧と色——日本人の肌色と『赤』のサイエンス」
吉川拓伸（株式会社資生堂）

- 4 時限 「色と紋様でめぐる織りと装いのメソアメリカ——メキシコ・グアテマラ」
本谷裕子(法学部教授)

11 月 14 日

- 3 時限 「源氏物語の色と紋様」
吉岡幸雄(染織史家)
- 4 時限 「多様な色の見え方に配慮したカラーユニバーサルデザイン」
伊藤 啓(東京大学分子細胞生物学研究所准教授)

11 月 28 日

- 3 時限 「“夢の青いバラ”開発にこめられた想い」
勝元幸久(サントリーグローバルイノベーションセンター株式会社研究部主幹研究員)
- 4 時限 「日本にもたらされたインドとペルシアの染織品の色と模様」
鎌田由美子(経済学部専任講師)

12 月 5 日

- 3 時限 「17・18 世紀の器楽に見る音と色」
石井 明(経済学部教授)
- 4 時限 「植物学と庭園と色彩——ゲーテの色彩論」
前田富士男(中部大学客員教授、慶應義塾大学名誉教授)

(小菅隼人)



開会の挨拶(納富信留教授)



講義後も質問に応えられる秋山豊子教授



千住 博氏



満席の会場(第4校舎 J29 教室)

3 カドベヤ

横浜市中区石川町5丁目にオルタナティブ・スペース「カドベヤ」が開設され、火曜日ごとの「居場所」を運営し始めてから2015年の6月で満5年が経過した。現在カドベヤは社会連携事業の現場として、大学の地域貢献の場であるとともに、地域から学ぶフィールドワークの本拠地にもなっている。

2015年度も授業としては法学部設置の「人文科学特論」および「人文科学研究会」（ともに横山千晶担当）のフィールドワークの場として機能した。また火曜日ごとに運営されている「居場所『カドベヤで過ごす火曜日』」では、「表現ワークショップ」と「共に食べ、語る」という二つの作業を通して、コミュニティにおける二つの「術」（「芸術」と「よりよく生きる術」）を見直し、共有する場として、5年目を迎えている。本年度も昨年度に引き続き、3月にはこの「表現ワークショップ」のコンテンツを二つのクラスの学生たちが協同で企画、運営し、授業最後の振り返りとして小さなコミュニティづくりについてともに考える機会とした。

居場所の運営に関しては去年に増して子どもたちの参加が増えてきたこと、外部アーティストの協力により、これまでの身体ワークショップに加え、朗読や作詩、講演、映画上映など身体のみならずさまざまな「表現」を駆使したワークショップが増えてきたことが特徴であろう。参加者が自ら案内人を務めるワークショップは今年も積極的に開催した。

現在居場所の運営に際しては、義塾内外のメンバーによる運営委員会によって3ヶ月に一度、振り返りと問題点の共有が図られている。また2015年度は新たに二つの研究と活動が派生的に行われている。一つはコミュニティアートのあり方を研究すること。そして子どもの貧困や格差の問題に取り組むためのネットワークづくりである。前者に関しては、運営委員会のメンバーが中心となり、イギリスにおけるコミュニティダンスの牽引者であるセシリア・マクファーレン氏を招いて日吉キャンパスでワークショップを行うほか（11月28日）、帝塚山大学の教員とともに障がい者による芸術を使つての自立にとりくんでいる「たんぽぽの家」を訪問した（2016年3月31日～4月1日）。子どものためのネットワークづくりに関しては、昨今広まりつつある「子ども食堂」の動きを運営委員会のメンバー数名で視察し、子どもの見守り機能としての居場所のあり方を考察している。

カドベヤは4年前からヨコハマアートサイトの採択事業として、「創造都市」としての横浜の市民活動の一部を担っている。今後は大学としてどのようにまちづくりに貢献できるかの手法を研究し、実践に移す活動を展開する。そのために、満6年目を迎える2016年度は量的・質的調査を行うことにより、参加者と居場所の有機的なつながりをさらに詳しく見ていく予定である。（カドベヤのHP <http://www.kadobeya2010.net/>）

（横山千晶）



セシリア・マクファーレン氏のワークショップ



居場所「カドベヤで過ごす火曜日」でのワークショップ

4 神奈川県ヘルスケア・ ニューフロンティア講座 「文化としての病と老い」

これまで、教養研究センターは、「身体知」、「生命の教養学」など、「生きることの意味」、「生きるものの価値」を強く意識した研究・教育を行ってきた。これは、心や身体から乖離した知識偏重は、真の教養ではなく、むしろ教養の対極にあるものという直感による。2015年、教養研究センターは、神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア構想の一環として、文化と教養の視点から、病と老いについての教育・研究活動を始めた。

この講座は、教養研究センター所長、三人の副所長、学内の二人の専門家によって構成される運営委員会によって設計、運営された。基本構成は、①学生・一般対象の公開講座、②学生・一般対象のワークショップ、③研究活動および研究会であり、これらは「業務完了報告書」に纏められている。

1. 公開講座では、老年学、医学史、演劇学、文学など様々な面から、「病」と「老い」とどのように向き合い、それをどのように解釈し、どのように表現し、どのように価値づけるかという問題について、専門研究者の報告を聴き、ディスカッションを行った。講義は平日の夕方4回、16:30～18:00に設置され、50名～150名の参加があったが、神奈川県在住の一般参加者が多数を占めた。第一回目冒頭には、神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア 医療政策担当の首藤健治理事による構想全体の趣旨説明が行われ、続いて、この構想に取り組むにあたっての慶應義塾としての基本理念が教養研究センター所長から説明された。
2. ワークショップは、土曜日午後2回行われた。一つは、舞踏家ビショップ山田による講義と実演、もう一つは、晩年に認知症を患ったイギリス女流作家アイリス・マードックを扱った映画『アイリス』を上映し、イギリス映画を専門とする佐藤元状准教授による解説と討論を行った。映画に描かれたアイリスと実際のマードック夫妻のあり方を中心に、参加者の多くから発言があり充実したワークショップになった。
3. 研究活動と研究会では、まず、障がい者の舞踏ワークショップに取り組む中嶋夏氏のインタビュー取材が行われた。これは記録され報告書に盛り込まれたが、いずれ再編集されて

神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア講座 文化としての病と老い

慶應義塾大学教養研究センターは、「身体知」、「生命の教養学」、「在りセメナー」など、教養を通して「生きるものの意味」、「生きるものの価値」を問いかける研究・教育を行っています。この際、これまでの活動を通じて、「文化としての病と老い」という研究テーマに取り組みにあたり、2015年度秋、4回の公開講座、2回のワークショップを慶應義塾生のみならず、一般の方にも公開します。

開催要項
10/6 (火) 16:30～18:00 生きることと病むこと—その歴史的な変遷— 鈴木晃仁 慶應義塾大学 経済学部教授
10/27 (火) 16:30～18:00 病とユートピア：認知症の医療人類学 北中淳子 慶應義塾大学 文学部准教授
10/31 (土) 午後(未定) 「病と舞踏」—ビショップ山田によるレクチャーワークショップ— ビショップ山田 舞踏家
11/17 (火) 16:30～18:00 高齢社会と運動器の障害 黒澤 尚 順天堂大学 順天堂東京江東両区看護医療センター特任教授
12/15 (火) 16:30～18:00 歌舞伎に見る「病」—その心意伝承— 犬丸 治 演劇評論家 歌舞伎学会運営委員
1/16 (土) 午後(未定) 映画「アイリス」上映会+レクチャーワークショップ 佐藤元状 慶應義塾大学 法学部准教授

募集要項

募集対象：慶應義塾大学生・大学院生、一般
 会場：慶應義塾大学 日吉キャンパス内
 受講料：無料
 講師・ワークショップとも1回からの申し込みが可能です。
 複数回の申し込みも歓迎いたします。

募集定員
 300名 定員に達し次第募集を締め切ります。

受付期間
 2015年7月25日(土)～9月25日(金)

申込方法
 教養研究センターWEBページの申し込みフォームから申し込みください。

ワークショップ
 受付期間、申込方法等詳細は、8月に開講教養研究センターWEBページをご覧ください。

ヘルスケア・ニューフロンティア構想
 「「病」の認識や「老い」の捉え方」、「人生をどう生きるか」というアプローチを軸にすることにより、健康寿命を延ばすとともに、新たな産業を創出し、誰もが元気で暮らせる社会を目指す。慶應義塾のプロジェクト。
<http://www.pref.kanagawa.jp/div/012/>

慶應義塾大学教養研究センター
 神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア講座 事務局 URL: <http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/>
 〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1 Tel.045-563-3978 Fax.045-563-3979
 E-mail: lib-arts@lib-arts.hc.keio.ac.jp (休講日のお問い合わせは土日祝日および6月20日～31日を除く9時～17時)

●慶應義塾の学生にのみ参加可能な個人研究の募集
 慶應義塾大学教養研究センター主催「文化としての病と老い」公開講座・研究会に関する個人研究員募集、「病と老い」ヘルスケア・ニューフロンティア講座、生命の教養学センターからの依頼を受け、その中で実施し、サテライト・イベントに参画し、慶應義塾ならびに関係機関や委員会に提出された研究報告書が論文や「病と老い」をテーマとした書籍等に発表される。個人研究員は、これらの活動に必要に応じて参加することになります。この募集は随時受け付けられ、関係機関の教養研究センターに発表されることとなります。

学術雑誌で公開される予定である。さらに、3月2日には、研究会を開催した。これは、当センターの研究組織の多様性を生かして、研究の課題である「文化としての病と老い」を①「病・老とは何か」(実体概念としての「病」と「老」)、②「病・老はどのように表現されるか」(芸術概念としての「病」と「老」)、③「病・老はどのような価値(反価値)を持つか」(価値観としての「病」と「老」)をめぐる諸問題に整理し、これを有機的に連携させたものである。もとより、この3つの視点の差別化でなく融合が目的であるから、この研究会において、四人の研究者による充実した発表の後、互いの視点を排除することなく、広い視野での検討を行った。

【今後の展望】 公開講座とワークショップにおいては、毎回、アンケートを取っている。運営委員会において、その反応を分析して、今後の展開に活かしていくつもりである。2015年度は「病」に力点を置いたので、2016年度は「老い」を中心に、基本的には、公開講座、ワークショップ、個人研究活動、

研究会の4本の柱で考えているが、そのバランスは、2015年度の参加者の分析を検討して決める。教養研究センターのみならず、慶應義塾内の諸研究所・センターとの連携も視野に入れて、神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア構想をさらに進めていきたいと考えている。

(小菅隼人)

神奈川県ヘルスケア・
ニューフロンティア講座研究会
「文化としての病と老い」

2016年3月2日(水) 10:00-17:30
慶應義塾大学 日吉キャンパス来往舎 シンポジウムスペース
入場無料・予約不要・研究者対象

10:00-10:15 開会・趣旨説明
10:15-11:30 廣川和花(専修大学文学部准教授)
◆「和解」の時代のハンセン病史 ―「顕彰」と「検証」をこえて―
11:45-13:00 荒本文実(慶應義塾大学理工学部専任講師)
◆美術と病 ―1348年のペストを中心に
13:00-14:15 お昼休憩
14:15-15:30 中村哲子(駒澤大学総合教育研究部外国語第一部門准教授)
◆ビッグ・ハウス小説における病 ―エイダン・ヒギンズとモリー・キーンを中心に
15:45-17:00 神山彰(明治大学文学部教授)
◆近代日本の西洋演劇受容に見る「狂気」と鬼の表象
17:00-17:30 まとめ・閉会

主催：神奈川県・慶應義塾大学教養研究センター お問い合わせ：toiawase-lib@adst.keio.ac.jp



北中淳子氏(10月27日)



犬丸治氏(12月15日)



黒澤尚氏(11月17日)



佐藤元状氏(1月16日)

1 運営委員会委員

2015年4月1日～2016年3月31日在籍者
第7期(2013年10月1日～2015年9月30日)
第8期(2015年10月1日～2017年9月30日)

教養研究センター担当常任理事
長谷山彰

教養研究センター所長
小菅隼人

教養研究センター副所長
大出 敦
片山杜秀
工藤多香子

教養研究センター事務長
吉川智江

文学部長
関根 謙(2015年9月30日まで)
松浦良充(2015年10月1日から)

経済学部長 中村慎助

法学部長
大石 裕(2015年9月30日まで)
岩谷十郎(2015年10月1日から)

商学部長
金子 隆(2015年9月30日まで)
榎原研互(2015年10月1日から)

医学部長 岡野栄之

理工学部長 青山藤詞郎

総合政策学部長 河添 健

環境情報学部長 村井 純

看護医療学部長
太田喜久子(2015年9月30日まで)
小松浩子(2015年10月1日から)

薬学部長
望月真弓(2015年9月30日まで)
杉本芳一(2015年10月1日から)

文学部日吉主任
斎藤太郎(2015年9月30日まで)
坂本 光(2015年10月1日から)

経済学部日吉主任
青木健一郎(2015年9月30日まで)
境 一三(2015年10月1日から)

法学部日吉主任 下村 裕

商学部日吉主任
英 知明(2015年9月30日まで)
種村和史(2015年10月1日から)

医学部日吉主任 南 就将

理工学部日吉主任 萩原真一

薬学部日吉主任
杉本芳一(2015年9月30日まで)
阿部芳廣(2015年10月1日から)

体育研究所所長 石手 靖

日吉メディアセンター所長
横山千晶(2015年9月30日まで)
斎藤太郎(2015年10月1日から)

外国語教育研究センター所長
七字眞明

自然科学研究教育センター所長
小林宏充(2015年9月30日まで)
金子洋之(2015年10月1日から)

日吉研究室運営委員会委員長
小宮英敏(2015年9月30日まで)
朝吹亮二(2015年10月1日から)

日吉キャンパス事務長
富山優一(2015年5月31日まで)
栗谷文治(2015年6月1日から)

日吉学生部事務長
黒田修生

日吉メディアセンター事務長
市古みどり

日吉キャンパス事務センター課長
今村江里子

極東証券寄附講座運営委員会委員長
住友生命保険寄附講座運営委員会委員長
小菅隼人

基盤研究(慶應義塾大学教育カリキュラム研究)座長
佐藤 望

基盤研究(社会・地域連携)代表
羽田 功

日吉行事企画委員会(HAPP)委員長
石井 明

日吉キャンパス公開講座運営委員会委員長
納富信留

2 組織構成員

2015年4月1日～2016年3月31日

所 長：小菅隼人(理)

副所長：大出 敦(法)、片山杜秀(法)、
工藤多香子(経)

コーディネーター：

斎藤太郎(文・2015年9月30日まで)、
下村 裕(法・2015年10月1日から)、
佐藤 望(商)、種村和史(商)、赤江雄一(文)
羽田 功(経)、長田 進(経)、高山 緑(理)、
鈴木晃仁(経)、有川智己(経)、徳永聡子(文)、
横山千晶(法)、前野隆司(SDM研究科)、
高田眞吾(理)、石井 明(経)、納富信留(文)、
富山優一(キャンパス事務長・2015年5月
31日まで)、
栗谷文治(キャンパス事務長・2015年6月1
日から)、
吉川智江(教セ事務長)

広報担当：工藤多香子(経)

日吉行事企画委員会(HAPP)

委員長：石井 明(経)

委員：高橋宣也(文)、大出 敦(法)、
佐藤 望(商)、竹内美佳子(商)、
森吉直子(商・2015年11月30日まで)、
津田眞弓(経・2015年12月1日から)、
小菅隼人(理)、小宮 繁(理)、森 泉(理)、
杉山由希子(理)、石手 靖(体研)、
徳村光昭(保セ)、
富山優一(キャンパス事務長・2015年5月31
日まで)、
栗谷文治(キャンパス事務長・2015年6月1
日から)、
今村江里子(運営サ)、
加賀齊天(運営サ・2015年5月31日まで)、
澤藤正哉(2015年6月1日から)、
山崎健二(学生部)、篠塚憲一(学生部)、
服部剛久(学生部)、
市古みどり(日吉メディアセ)、
酒見佳世(日吉メディアセ)、
日水邦昭(教セ・2015年5月31日まで)、
池本晶子(2015年6月1日から12月31日まで)、
鈴木都美子(2016年1月1日から)
高橋 剛(社会・地域連携室)

極東証券寄附講座運営委員会

委員長：小菅隼人(理)

委員：大出 敦(法)、片山杜秀(法)、
工藤多香子(経)

「生命の教養学」企画委員：

委員長：赤江雄一(文)

委員：山下一夫(理)、高桑和巳(理)、鈴木晃仁(経)、
小野裕剛(法)、小瀬村誠治(法)、
板垣悦子(体研)、佐藤聖(慶大出版会)、
吉川智江(教セ事務長)

日吉キャンパス公開講座運営委員会

委員長：納富信留(文)

委員：小菅隼人(理)、大出 敦(法)、石井 明(経)、
秋山豊子(法)寺沢和洋(医)、山下一夫(理)、
前野隆司(SDM研究科)、佐々木玲子(体研)

住友生命保険寄附講座運営委員会

委員長：小菅隼人(理)

委員：大出 敦(法)、片山杜秀(法)、
工藤多香子(経)、佐藤 望(商)

教養研究センター事務局

吉川智江(事務長)
日水邦昭(2015年10月31日まで)
池本晶子(2015年6月1日から)
山口 中(2015年10月31日まで)
鈴木都美子(2015年11月1日から)
傳 小史

3 2015年度の主な活動記録

Date	Events
4	3日 教養研究センター設置科目全体ガイダンス 7～10日 クラス別ガイダンス 7～13日 HAPP企画 新入生歓迎「大学体育施設紹介と体力測定&プール開放」 16日 ピア・メンター新入生歓迎トークセッション 「後悔しない日吉ライフ～大学で学ぶということ～」 17日 第1回情報の教養学「歴史の転換期と報道の使命」 24日 HAPP企画 新入生歓迎行事：大野慶人舞踏公演「花と鳥：内部と外部」 25日 第1回日吉学「日吉の森で生物多様性デジタルマップを作ろう」 28日 HAPP企画 新入生歓迎講演会「物語の世界」 「『ガリヴァー旅行記』の楽しみ方—文学、絵画、映画、そして人間理解」
5	8日 HAPP企画 新入生歓迎講演会「ことばの世界」[軽蔑的即席造語の二つの型] 8日 第1回所長副所長会議 9日 HAPP企画「塾長と日吉の森を歩こう」 13日 第2回情報の教養学「脳を知り、脳を治す」 15日 ニュースレター 26号刊行 19日 HAPP企画 新入生歓迎行事「ゲキ×シネの世界(罫罫城の七人)」 23日 第2回日吉学「歩いて、見て、考える、日吉の戦争遺跡」 25日 ピア・メンター「レポートの書き方講座」(基礎編)① 28日 ピア・メンター「レポートの書き方講座」(基礎編)② 29日 第1回コーディネートオフィス会議
6	4日 ピア・メンター「レポートの書き方講座」(発展編) 5日 第2回所長副所長会議 6日 第3回日吉学「日吉は地図と地上観察で遊ぶとこんなに面白い！」 8日～7/25 庄内セミナー関連企画「庄内フェア」開催 17日 第13回「研究の現場から」赤江雄一、池田真弓 17日 第3回情報の教養学「貧困を測る」 19日～7/31 学習相談企画展示「ちょっと待ってちょっと待ってお兄さん！正しいスケジュールリングって何ですか？」
7	5日 HAPP企画「日吉音楽祭 2015」 6日 HAPP企画「FIFA WOMEN'S WORLD CUP カナダ 2015 決勝 日本代表を応援しよう！」 17日 第3回所長副所長会議
8	3日 庄内セミナー説明会 3日 第2回コーディネートオフィス会議 28～31日 2015年度庄内セミナー（山形県鶴岡市） 31日 「2014年度活動報告書」刊行
9	3～4日 初年次教育学会@明星大学日野キャンパス 9日 第1回運営委員会 26日 HAPP企画「日吉音楽祭 2015 室内楽・ピアノマラソンコンサート」 30日 『生命の教養学 11 性』刊行

Date	Events
10	5～10日 6日 HAPP 企画「最後の吉原芸者の記録～ GEISHA とは何かを学ぶ講演と展示～」 神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア講座①講義 「生きることと病むこと — その歴史的な変遷」 13～20日 学習相談セミナーウィーク 14日 第14回「研究の現場から」納富信留、新井和広 16日 第4回所長副所長会議 17日 第4回日吉学「楽しい考古学 — 日吉の遺跡と遺物の楽しみ方を考える —」 19日 HAPP 企画「性の多様性を考える公演とディスカッション」 23日 第4回情報の教養学「昭和の歴史と戦争を考える」 24日 バッハ・モテット×シュツツの複合唱 26～31日 HAPP 企画「In the Cloud, On the Cloud ～ Sustainable Pavilion in Hiyoshi ～」 27日 神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア講座②講義 「病とユートピア：認知症の医療人類学」 27日 学会・ワークショップ支援制度 講演会「うんこはごちそう」 31日 神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア講座③ワークショップ 「病と舞踏—ビショップ山田によるレクチャーワークショップ」
11	2日 HAPP 企画「8 Hands' Piano Performance vol.2」 4日 第5回情報の教養学「日本経済は再生するか～構造変化の現実を理解しよう～」 7日 第5回日吉学「めざせ縄文人—日吉の森で食べられる実を探そう—」 17日 神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア講座④講義「高齢社会と運動器の障害」 18日 第3回コーディネートオフィス会議 27日 第5回所長副所長会議 30日 ニューズレター 27号刊行
12	1日 HAPP 企画「たかまつななの笑えて学べるニュース～国際協力編～」 3日 実験授業「パフォーマンス社会学への誘い」 9日 第15回「研究の現場から」津田真弓、北川千香子 12日 第6回日吉学「日吉のアーカイブマップを作ろう！」 12日 HAPP 企画 古典落語と演劇「芝浜」 15日 神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア講座④講義「歌舞伎にみる『病』～その心意伝承～」 15、16日 学会・ワークショップ支援制度「日吉电影节 2015」 16日 第6回情報の教養学「次世代著作権～激増するコンテンツを握るのは誰か」 16日 ピア・メンター「2地区合同トークセッション 研究の始め方・続け方 —それがお前のやり方か!？」 19日 第7回日吉学「個人のアイディアを融合して革新的なアイディアを生み出すには？」
1	8日 第6回所長副所長会議 10日 慶應義塾大学コレgium・ムジクム古楽オーケストラ演奏会 — ドイツ管弦楽組曲の響き — 16日 神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア講座④ ワークショップ「映画『アイリス』上映会+レクチャーワークショップ」 19日 教員サポート「学生相談室のカウンセラーとして思うこと—今を生きる学生達への支援のために—」 20日 慶應義塾大学コレgium・ムジクム演奏会(合唱とオーケストラ音楽) 23日 学会・ワークショップ支援制度「ナターリア・ペトロヴスカイ氏講演会」
2	5日 極東証券寄附金講座アカデミック・スキルズ プレゼンテーション・コンペティション 26日 第4回コーディネートオフィス会議
3	2日 神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア講座研究会「文化としての病と老い」 3日 第2回運営委員会 11日 2016年度学習相談キックオフミーティング 25日 神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア講座 2015年度業務完了報告書発行 30日 教養研究センター選書 15『ダンテ『神曲』における数的構成』刊行 31日 2015年度アカデミック・スキルズ学生論文集刊行

慶應義塾大学教養研究センター
2015年度 活動報告書

2016年8月31日発行
編集・発行 慶應義塾大学教養研究センター
代表者 小菅隼人

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1

TEL 045-563-1111(代表)

Email lib-arts@adst.keio.ac.jp

<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/>

編集・制作 慶應義塾大学出版会

印刷・製本 (株)太平印刷社
